



TITLE:

<報告1>ニカーブをまとうまで --装
いの選択と拮抗する「社会」

AUTHOR(S):

後藤, 絵美

CITATION:

後藤, 絵美. <報告1>ニカーブをまとうまで --装いの選択と拮抗する「社会」. CIRAS
discussion paper No.80: 社会主義的近代とイスラーム・ジェンダー・家族 2: 装いと規
範 --現代におけるムスリム女性の選択とその行方 2018, 80: 7-14

ISSUE DATE:

2018-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_80_7

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

ニカーブをまとうまで 装いの選択と拮抗する「社会」

後藤 絵美

東京大学

今日のワークショップではニカーブ (niqāb) と呼ばれるムスリム女性の顔覆いを題材にお話しさせていただきます。2003年から5年まで、私はエジプトのカイロに留学をしていたのですが、そのときに出会った女性で、当初はニカーブをかぶっておらず「私はかぶらない」と言っていたのに、ある日突然かぶり始めた友人がいます。その人のことを入口に「装いから何が見えてくるのか」という本ワークショップの共通の問いを考えてみたいと思います。

1. はじめに

「装いから何が見えてくるのか」。この問いを前に、分析者はさまざまなアプローチをとり、さまざまな答えを出すことが可能です。今回の報告では、現代を生きるムスリムの人々にとって、装いの選択と社会——この単語を使うといろいろ問題が起こりそうな気もしますが、とりあえず——とが、どのようにかわっているのかを明らかにしたいと思います。

社会という言葉の定義は必ずしも一つに決まっておらず、論者によって異なるようですが、私はここでそれを「規範や記号、価値観が共有される空間」という意味で使いたいと思います。これは次のような服飾史の議論を前提にした定義です。服飾史とは、人類がなぜ、どのように装ってきたのかを歴史的に究明する学問ですが、その中では、装いをめぐって次のような要因があるといわれてきました。

第一に、生理的な要因です。暑さや寒さ、日光や風雨、害虫などから体を保護する必要がある。そこで、気候や環境に適した衣服が選ばれてきました。しかし、それだけではありません。人は社会的・心理的な要因によっても、衣服を用いたり、選んだりしてきました。身体のどの部分を、何によってどう覆うべきかという規範や、一定の装いがもつ記号的な役割、そこに付される価値が共有される空間があります。それを「社会」と呼ぶとして——その社会の規範や記号、

価値観に従いたい、従わなければならないという思いから、衣服が用いられ、選ばれてきたのです。

衣服を着るというのは、私たちが毎日経験していることで、こうした説明に「なるほど」と経験則でうなずける部分もあるかと思いますが、今回は、ムスリム女性が身体を覆うという行為を通して、装いと「社会」の関係について一步踏み込んでみたいと思います。結論からいいますと、人は同時に複数の「社会」(＝規範や記号、価値観が共有される空間)を生きているということを示します。そのために、まずは、ムスリム女性の装いに関するいくつかの事例を紹介し、その後、エジプトでのニカーブ着用の例を少し詳しく見ていく中で、それらと関わる「社会」が、具体的にどのようなもので、いかにして形づくられてきたのかを明らかにしたいと思います。

2. 複数の「社会」を生きる

資料1-1に写っているのはイランの女性たちです。イランでは1979年のイスラーム革命の後、女性が外出時にスカーフやコートで身体を覆わなければならないとなりました。そうしないと法律違反として



資料1-1 イランの女性

<http://www.dailymail.co.uk/news/article-5347779/Iran-anti-hijab-protests-continue-despite-earlier-arrests.html>



資料1-2 サウジアラビアの写真

<http://www.businessinsider.com/r-saudi-arabia-to-let-women-enter-sports-stadiums-in-2018-2017-10>

処罰されます。ところがごく最近、このように街中でスカーフを脱いで棒に刺すというデモンストレーションをする人びとが増えているそうです。彼女たちは、スカーフの着用を強制されることに反対していて、その意思を表明しているのです。

こうした抗議行動は、じつは現実の空間で続けられているわけではありません。その瞬間の写真をSNSで発信するという形がとられています。この写真を見たとき、私は、彼女たちの周りに少なくとも二つの社会があると考えました。一つは、彼女たちが生きている現実の社会で、そこではスカーフの着用が規範であり、記号であり、価値をもつものとされている。しかし、写真の中の彼女たちの服装は、そこに彼女たちが求める別の社会があることを示しています。そこでは、スカーフをかぶらない服装こそが、規範であり、記号であり、価値をもつものとなっています。この写真には、こうした二重性が映し出しされています。

資料1-2は『BUSINESS INSIDER』というウェブ雑誌に掲載されていた写真で、サウジアラビアで女性たちがスポーツ・スタジアムに行くことが間もなく解禁されるというニュースに付されていたものです。ここに写っている女性たちは、社会規範の中で、あるいは社会の記号や、価値ある女性として、顔覆いと手袋を含め、真黒な服装で全身を覆っています。

以前、一度だけサウジアラビアの首都リヤドを訪れたことがあります。サウジ社会に入る以上、私もこれに近い格好をしなければならないと考え、直前に滞在したエジプトのカイロで、黒い長い上着と大きめのスカーフを購入しました。リヤドに入った後は、できるだけしっかりと頭髮や体を覆っていました。ところが、サウジ人の人に「そんなにしないでいいよ。外国人は、べつに髪の毛を出していても大丈夫だ



資料1-3 ブルカの写真

<https://yougov.co.uk/news/2016/08/31/majority-public-backs-burka-ban/>

から」と言われて拍子抜けしました。同じ社会空間の中でも、規範や記号、価値ある外見の適用のしかたが異なっているという場合があります。

資料1-3には、同じく全身真黒な姿の女性が写っています。これはイギリスのウェブマガジンに載っていた写真です。この顔覆いをイギリスではブルカと呼んでいるそうですが、国内でのブルカの着用を禁止したいと多数派が思っている、という内容の記事です。現在、ヨーロッパではブルカの問題が大きく取り上げられています。2011年のフランスを皮切りに禁止法を制定する国も出てきています。国全体ではなくとも、たとえば、ある場所では着てはならないとか、地域的に着用の禁止が決められているとか、そうした国もあります。さらにはイギリスも含めて禁止提案のある国や、法案というレベル以外にも世論として禁止しようという動きがある国も見られます。

2010年代はブルカ、ニカーブの禁止がとくに語られた時期です。この写真を見て気づくのは、同じ社会空間に生きながらも、服装がまったく違う人びとがいることです。このように一つの装いに着目することで、異なる規範や記号、価値観が同じ社会空間にあることが見えてきます。

資料1-4はエジプトの写真です。エジプトはムスリムが多数派の国で、ニカーブをかぶっている人も多いのですが、エジプトもニカーブの着用を禁止することを考えているという記事です。これは2016年の比較的新しい記事ですが、ニカーブ問題というのはこれからお話しするように、30年以上も続いてきた問題なのです。エジプトでは1980年代から「ニカーブの着用を禁止しよう」という動きが繰り返し現れてきました。



資料1-4 エジプトの写真

<https://www.thestar.com/news/world/2016/03/11/egypt-considers-law-banning-niqab-in-public.html>

3. ニカーブとエジプト社会(現実の社会)

1970年代頃から、エジプトでは、ヒジャーブと呼ばれる女性のヴェール——頭髮を覆ったり体の線を覆ったりするもの——が普及し始めました。そういう時期にあってもニカーブという顔を覆うヴェールの着用は、「必要以上に」女性の体を覆い隠す行為とみなされ、あるいは、過激で戦闘的なイスラーム運動組織との関与が疑わしいとされました。ニカーブを用いている人は、たいていゆったりとしたコート式のワンピースを着ていましたが、その下に爆弾を持っていたにもかかわらず危険だ、というのです。実際に、2000年代半ばに、カイロの中心部の陸橋の下で、ニカーブを着用した女性が自爆攻撃をするという事件がありました。その時、エジプトのメディアは「それ見たことか」と大きく取り上げました。

「ニカーブの着用を禁止しよう」という具体的な動きですが、1985年にカイロ大学の構内で禁止措置がとられました。このときに言われたのは、治安の問題の他に、「顔が見えないとコミュニケーションが阻まれ、教育上不適切である」という話と「試験の際の本人確認ができない」という実質的な問題が挙げられていました。本音をいえば治安の問題が一番の鍵だったのではないかと思います。この頃の大学では「イスラーム主義運動」と呼ばれる、ときに暴力も伴う反体制的な動きが盛んでした。

1994年には、教育省令によって、大学よりも早い段階での禁止が定められました。つまり、小中高校生に対して、校内でのニカーブ着用が一切禁止されたのです。スカーフを着用することも保護者の許可が必要となりました。

この問題は何年かに一度再燃するのですが、2000年代には、再び大学での着用論争が起こりました。そ

の時、国家の宗教権威の一人である寄進相が「ニカーブ着用は宗教上の義務ではなく単なる慣習にすぎない」という意見を公表しました。これに対し、アズハル機構(カイロにあるスンナ派有数のイスラーム教学機関)の女性教授が加勢をして、「ニカーブをする人たちはイスラームについて何も知らない」と発言しました。2000年代のエジプトでは、ニカーブを、過激なイスラーム運動や、後進性、狂信性、無知などと結び付ける言説が流行したのです。

ニカーブと後進性、狂信性、無知のつながりというのは、小説などにも登場するモチーフでした。たとえば、ナワール・サアダーウィーの『女子刑務所——エジプト政治犯の獄中記』¹⁾には、読み書きができずクルアーンを読んだことさえない女性が、ラジオで「ムスリム女性はヒジャーブをまとわなければ来世で地獄に行く」という宗教家の言葉を聞き、さらに、いここに「ニカーブをまえば地獄に行かないですむ」と言われてニカーブをまとうようになったという場面が描かれています。

一方、1980年代から2000年代の時期に、ニカーブの着用を選択した女性たちの存在も報告されてきました。つまりこんな時期にもかかわらず、自ら進んでニカーブをかぶった女性たちがいたというのです。

彼女らを取り上げた研究の一つが、ワーナーの『西洋化とヴェールのあいだ』です²⁾。これは著者が1990年代初頭にカイロにあるアインシャムス大学で行った調査をもとにしたもので、その中には、当時出会った4人の女子学生たちのエスノグラフィーが記されています。

4人のうちの1人にヘンドという女性がいました。ヘンドはもともと、テレビや音楽に夢中な大学生でした。ところが、あるきっかけから宗教的な女性たちと交わり始め、その生き方にひかれるようになりました。その後、ヘンドはスカーフをまとい始めました。続く半年間、友人たちとクルアーンの録音テープや宗教パンフレットを交換しあい、ともにアッラーについて語り、宗教関連の勉強会に出席する中で、さらに上の段階に進むための強さがえられたと思ったヘンドは、それまでの小さなスカーフを大判のヒマール——尼僧のかぶりもののような、長くて地味な頭髮覆い——に切り替えました。その後しばらく

1) ナワール・エル・サアダーウィー著、鳥居千代香訳『女子刑務所——エジプト政治犯の獄中記』三一書房、1990。

2) Karin Werner, *Between Westernization and the Veil*. Bielefeld: Transcript, 1997.

は、勉強で忙しく進展もなかったのですが、休みに入り、宗教書を読んだり、説教を聞いたり、敬虔な友人らと語りあって過ごす時間が増えるようになりました。すると、ヘンドは次の段階に進めると考え、ニカーブをまといはじめたそうです。

ワーナーが5ページにわたって記述した記録から、ヘンドが、自らの服装の段階的变化を、信仰心の高まりや宗教知識の獲得と関連づけて語っていることがわかります。しかし、分析者であるワーナーの関心は、信仰心や宗教知識ではなく、ヘンドの言葉の裏側に潜む「西洋」という仮想敵の存在を明るみに出すことに向けられていました。つまり、「西洋化とヴェールのあいだ」にある葛藤を描くことにすべての力がそそがれたのです。この研究を読みながら、私は、視点を変えればこれとはまったく違うものが見えるのではないか、と思うようになりました。

4. ニカーブとサラフ主義(理想とする社会像)

4.1 サハルとニカーブ

そうした時、私はサハル(仮名)という女性と出会いました。2005年に結婚と同時にカイロにやってきた彼女は、当初大きめのヴェールで頭髮や身体のラインを覆っていました。ロングスカートををはき、ヒマールほど地味ではないのですが、上半身が隠れるようなスカーフを巻いていました。サハルは物心ついたときからこういう格好をしていたと私に説明しました。アズハル系の学校でアラビア語学を学んだという話からも、どちらかといえば宗教熱心な家だったようです。

2005年、サハルはサラフ主義説教師ムハンマド・ハッサンの説教『ムスリム女性のヒジャーブ』を繰り返し聞いたあとで、「納得した」と言ってニカーブをまとい始めました。以前、彼女とニカーブの話をしたとき、彼女は「私はニカーブをするつもりはない。必要ないと思うから」と言っていたのを覚えていたので、彼女の決断に私はとても驚きました。そこで「この説教が原因なのか」と思い、私自身、一所懸命説教を聞いてみることにしました。

4.2 サラフ主義とニカーブ

この説教をおこなった人物を紹介する前に、簡単に「サラフ主義」と呼ばれるものについて、私自身の理解のあり方を示しておきたいと思います。サラフ

資料1-5 現代のサラフ主義者の特徴

- (1)女性が顔覆いを着用することを義務づける。
- (2)男性が足首よりも長い衣服を着ることを禁じる。
- (3)音楽を禁じる。
- (4)喜捨を一定額以上出さない。
- (5)男性はアラブ風(サウジアラビアのものなど)の衣服を着る
- (6)あご髭を剃ったり、整えたり、刈り込んだりすることを禁止する。

Sālim and Basiyūnī 2015: 35

主義というのは単一の組織や運動体ではなく、サラフと呼ばれるイスラームの初期世代(使徒ムハンマドと接した「教友」とその後継)をもっとも優れた人びとと捉える思想潮流の総称です。その中にはさまざまなグループがあり、エジプトに関して言うと、アズハル系、サウジ系、その他、中には過激な思想や行動の人びともいれば、政治や社会変革には関与しないという立場をとる人びともいます。また、決まったグループには属せずに個人として活動する人もいます。

ある研究書によると、サラフ主義に共通する「基本的方法論」とは、第一に、信条、立法、行動、及び公の事柄を、クルアーンとスンナ(使徒ムハンマドの慣行)に依拠して導き出すというものです。第二に、教友と後継の世代および彼らの道に従った各時代のウラマー(宗教学者)の理解を参照して、それを固辞するとあります³⁾。宗教典拠と、その本来の意味を確実に理解した人たちに従うことが必要だということです。

同じ本にサラフ主義者の特徴も出ていました。興味深いことに、第一の特徴として挙げられていたのは「女性が顔覆いを着用することを義務づける」点です。男性にも服装規範があり、「足首よりも長い服を着ることを禁じる」とあります。これは贅沢を戒めるという意味からだと考えられますが、その他にも、「音楽を禁じる」、「喜捨を一定額以上出さない」、「男性はアラブ風の衣服を着る」、「あご髭を剃ったり、整えたり、刈り込んだりすることを禁止する」というような特徴が挙げられています。お気づきのように、多くが外見の話です。装いというものがサラフ主義者を見るときにいかに注目されているのかがわかります。

3) Aḥmad Sālim and 'Amr Basiyūnī. *Mā Ba'd al-Salafīya: Qirā'a Naqdīya fī al-Khiṭāb al-Salafī al-Mu'āṣir*. Beirūt/ Riyadh, Markaz Namā' li-l-Bukhūth wa al-Dirāsāt, 2015.

5. ムハンマド・ハッサーンの経歴と影響力

5.1 経歴

次にムハンマド・ハッサーンという人物について紹介します。外見的な特徴ですが、アラブ風の服を着て、あご髭をのばしていることが目につきます。

ハッサーンは、1990年代半ば以降活躍してきたエジプト人のサラフ主義説教師の中でも、かなり名の知れた人物の一人です。2000年代初頭の時点で彼には400種類以上の説教を録音したカセットテープがありました。400種類はなかなか多いと思いますし、現在は2018年ですので、その後かなり増えているのではないとも思われます。衛星放送のテレビ番組に頻繁に出演し、自らのチャンネルも持っていました。

知名度に比して経歴等の情報が少ないのですが、ダカフリーヤ県のDimuh村の出身、小さな頃からイスラーム学に関心を持っていたそうです。カイロ大学に在学中の1980年代には、アズハルのウラマーによる講義や、ヨルダンに滞在していた著名なハディース（使徒ムハンマドの言行録）学者のアルバーニーの講義に参加しています。大学卒業後は、カイロ・イスラーム学研究所やサウジアラビアで高名なウラマーであり、主流派でもある、ビン・バーズやウサイミン、ビン・ジブリーンなどに師事しました。ハッサーンはサラフ主義の主要組織には加わらず、個人として活躍してきました。

5.2 影響力の源

ハッサーンの人気や影響力について分析したのがアメリカ人の人類学者Hirschkindです。彼によると、①詠唱的な美しい声を持つこと、②神秘主義詩を含む古典詩の引用が多いこと、それから③詩的世界の提示などによる聞く者の情動の喚起に秀でていること、④イスラームに関する知識の提示についての誠実な姿勢をもっていることが、ハッサーンの特徴です。特に最後の点である、イスラームの知識の提示に対する誠実な姿勢についてHirschkindはこう述べています。「その背景には、説教が録音という形で何度も再生されて、耳を傾けられるものとなったことがある。近年のエジプトで説教師の言葉は、以前に増して学問的な精査にさらされるようになり、かつ宗教専門家だけでなく、説教の聞き手となった一般大衆



資料1-6 ムハンマド・ハッサーン (左)と『ムスリム女性のヒジャーブ』(右、カセットテープ)

<https://www.facebook.com/Sheikh-Mohamed-185738211049->
/ الشيخ محمد حسان

がこの点にこだわるようになった⁴⁾。」こうした状況の中で人気を集めたのがハッサーンだったのです。

ある説教で彼が述べたことについて、後にカセットテープを聞いた人が「この部分は違うじゃないか」とクレームをつけたことがあるそうです。すると次の説教でハッサーンは、「私は前回の説教でこう言ったけれど、これは間違っていた。こちらが正しい」という訂正を行ったそうです。それが誠意ある姿勢と見られたと言われます。

6. 『ムスリム女性のヒジャーブ』

6.1 「ヒジャーブ」と「ニカーブ」

ではいよいよ、『ムスリム女性のヒジャーブ』と題する説教の中身に入りたいと思います。先に述べたように、ヒジャーブとはムスリム女性の覆い一般について用いられるアラビア語の単語です。2000年代に私がエジプトにいた頃、こうした題名の説教の録音テープや宗教冊子がたくさん出回っていました。それらの中では、「女性はヒジャーブをまとうことが必要だ」とか「重要だ」という話が繰り返されていました。

6.2 『ムスリム女性のヒジャーブ』の内容

『ムスリム女性のヒジャーブ』という説教は、クルアーンの24章、御光章の注釈を16回に分けて行ったシリーズ説教の第5回にあたるものです。同じテーマの他の説教や著述と内容を比較したときに、ハッサーンのこの説教の特徴と思われるのは、イスラ

4) Charles Hirschkind, *The Ethical Soundscape: Cassette Sermons and Islamic Counterpublics*, NY: Columbia University Press, 2006.

ム学の知識に裏づけられた詳細な情報が提示してあることです。

こうした説教や著述の中では、たいいていの場合、まずクルアーンの章句が紹介されます。それに若干の説明が加えられた後に、ハディースが紹介されます。そしてクルアーンとハディースという聖なる典拠の存在を提示することで、一定の覆いの着用在ムスリム女性の義務であると立証する形がとられてきました。ハッサーンの場合は、単に典拠となる言葉を提示するだけではなく、「それが根拠として信頼に値すること」をできるかぎり証明しようとするのです。

たとえばクルアーンの33章59節の部分を見てみましょう。同節にはこんな言葉があります。「預言者よ、おまえの妻と娘、そして信仰者の女性に言え、ジルバブをまとうように、と。それこそ彼女らが自分たちを知ってもらい悩まされないための最良の方法である」。この部分について、ハッサーンが最初に強調したのは、この啓示の命令が「信仰者の女性」にも向けられているという点です。つまり預言者の妻や娘たちだけでなく、信仰を持つ一般の女性たちもジルバブをまとうようにと命じられていたのです。

ではジルバブとは、いったいどういうものなのでしょう。これについて、ハッサーンは最初期のクルアーンの注釈者であるタバリーの注釈書に記された次の伝承を引用します。「イブン・アッバースによると、至高なる方のお言葉、『預言者よ、おまえの妻と娘、そして信仰者の女性に言え、ジルバブをまとうように』とは、神が女性信仰者に対して、必要があって家から外出するときには、頭からジルバブを垂らし、顔を覆い、片目だけを出しなさいと命じたという意味である」。

ハッサーンはこれを引用したあとに次のように述べています。「イブン・アッバースは、預言者ムハンマドの教友の一人で、もっとも権威あるクルアーン注釈者と目される人物である。そのイブン・アッバースが、『信仰者の女性は片目を除いて顔を覆うようにと、神がお命じになった』と伝えているのだ」。その上で「片目だけを出しなさい」と言ったという部分については、これは道を歩くときに、前が見えるようにするためだという説明をハッサーンが付け加えています。

それから、この伝承が同じくタバリーの注釈書に記される別の伝承の存在によって、さらに確実なものになるとも述べています。それはイブン・シーリーンという人物が伝えたという、以下の伝承です。「私

はウバイダに至高なる神のお言葉、『預言者よ、おまえの妻と娘、そして信仰者の女性に言え、ジルバブをまとうように、と』について尋ねた。するとウバイダは自分の衣服を示して、こうするのだと言った。そして彼は頭と顔を覆い、片目を出した」。

伝承の中で啓示の意味を解説した、このウバイダという人物についてハッサーンはこう補足します。「ウバイダ・サルマーニーは預言者の存命中に入信した人物で、すばらしい知識を持つ一人であった。ウバイダはカリフ・ウマルの時代になってからメディナにやってきて、死ぬまでそこに留まった。よって教友の女性たちのようすも知っていたため、この人物の言葉ほど信頼できるものはない」。

さらにハッサーンは、中世期の著名なクルアーンの注釈者の一人であるラーズビーの言葉を引用します。「この啓示には、若い女性が必要あって外出する場合、他人である男性に対して顔を覆い、自分が守られた存在であること、慎重な女性であることを示されなければならないという証拠がある」という言葉です。それから現代の注釈者のシンキーティー——この人もサラフ主義の間では有名な伝承学者の一人なのですが——彼の「この啓示には、女性が顔を覆わなければならないという明らかな示唆がある」という言葉も引用しています。

他にもハッサーンの説教では、たとえば24章31節の「そして外に表れているもの以外、体を人に見せないように」という部分について知られる伝承に二つのものがあることが示されています。まずイブン・マスウードという人が伝えた伝承は、「それは衣服である」と言ったというもの。一方、イブン・アッバースは「顔と両手である」と述べたとされています。ハッサーンは、「真正なのはイブン・マスウードの伝承のほうである。イブン・アッバースのものは信憑性が著しく低い。というのも、後者に記される伝承には、二つの経路があるが、どちらの経路にも伝承者として信頼されない人物が含まれているからである」。結論としてハッサーンは、「よってこの伝承から、前例や証拠を導き出すことはできない。知識ある者がここから義務を導き出すことなど、もってのほかである。そしてこれはハディース学の初歩を修めるものならば、みな知っていることなのだ」と述べたのです。

こうして『ムスリム女性のヒジャーブ』の中でハッサーンは、伝承の発信者や伝達者となった教友の名前、それから初期イスラームから現代までの伝承学

者、クルアーンの注釈者の名前と、彼らの主張に言及しました。しかも、出典も明示しながら、言及していることがわかります。さらにハディース学の方法論にのっとった形として彼が提示するものによって、関連する伝承や情報の信憑性が検討され、もっとも信頼に値する情報に即した理解で「ムスリム女性は（顔覆いも含めた形での）ヒジャーブを着用することが義務である」と説いたのです。

7. おわりに

サハルは『ムスリム女性のヒジャーブ』というこのカセットを繰り返し聞いたあとで「納得した」と言ってニカーブをまとい始めました。これをどう理解できるのでしょうか。ここまで見てきたように、ムハンマド・ハッサンの説教である『ムスリム女性のヒジャーブ』の特徴は、イスラーム学の知識に依拠した詳細な情報の提示にありました。預言者と同時代を生き、最初の啓示解釈者となった教友の人たちがいましたが、たとえばその人たちの権威、名前の拳がった伝承学者やクルアーンの注釈者の権威、そしてここで用いられたハディース学の方法論の正当性を認めた場合、ハッサンの説教は、極めて説得力のあるものと聞こえたのではないかと思います。

また、ムハンマド・ハッサンという人自身の権威もあります。彼が、たとえばサウジで勉強したとか、宗教知識の獲得にかかわる豊富な経験など、さまざまな要素がかかわってきますが、ここでいう権威について、一つ示唆的な文章があるので引用したいと思います。エジプト出身で、現在アメリカで活躍しているイスラーム法の専門家ハーレド・アブー・エル＝ファドルの『神の名において語ること』の一文です。

ハーレド・アブー・エル＝ファドル 『神の名において語ること』

「神の意思」と理解されること」がすべての権威の本源である。[神の言葉の]読み手が、望んで従おうとするものや、関連する事柄の中で唯一「正しい」として扱うものが、権威あるものとなる。よって、イスラーム法学のパラダイムの中にいる信仰者にとって、神の意思を示唆する教え（クルアーンやスンナ）は権威あるものとなり、また神の教えを読み解き、理解することを志す解釈者（集団や個人）も権威あるものとなる。ただし、解釈者が権威を持つのは、

信仰者が解釈者を信頼する場合のみである。その信頼とは、解釈者が五つの義務（誠実であること、謙虚であること、勤勉であること、十分に理解していること、理性的なこと）を果たしたと信じることによって生まれるものである」〔 〕内は引用者による）

イスラーム法学のパラダイムの中にいる信仰者にとって、神の意思を示唆する教えに加えて、それを読み解き理解することを志す者も権威あるものとなる。ただし、解釈者が権威あるものとなるのは、信仰者が彼を信頼する場合に限られる。アブー・エル＝ファドルはイスラームの権威についてそのように述べています。

ムハンマド・ハッサンの説教をサハルが聞き、実際に何を考えたのかではなく、周辺状況から、サハルの中で何が起こったのか、可能性を考えていくとき、第一に、彼女の周りには説教の内容を検証しうる環境があったということが指摘できます。メディアの状況、つまりカセットテープに録音したもので、何度も何度も繰り返し聞くことができます。一旦停止をして出典にあたり、情報が信頼できるものかどうかを確認することもできます。第二に宗教識字の影響も指摘できます。アズハルで学んできたサハルは、宗教識字の比較的高い女性だったと考えられます。そのことが彼女の後の行動に影響した可能性もあったでしょう。

アブー・エル＝ファドルの理解に従えば、説教の内容を受け入れることとは、すなわち、その中で示されているものを「神の意思」の一部として受け入れるということです。ある規範や記号、価値観——ここでは「顔を覆う」という規範や記号、あるいは「それが信仰者としてすばらしいことだ」という価値観を、神の意思の一部として受け入れるというプロセスがあった。サハルの場合、それは当時の現実の社会の持っている規範や記号、価値観とは異なるものでした。しかし、ムハンマド・ハッサンの説教に「納得した」という女性にとっては、理想とする社会像の規範や記号、価値観の方に従うことがより大切に思われたのかもしれない。

「装いから何が見えてくるのか」。現代のエジプト社会には、さまざまな装いの人がいます。ヴェールをまとう人、まとうない人、顎ひげをのばす人、のばさない人。たとえばそういう人びとが、自分はどのような社会の一員であるのか、どのような規範や価値観

の世界に生きているのか、生きたいと思っているのか、その装いを通して見えることがあるのです。

さらに、エジプトという文脈から出て、より広い世界に目を向けたとき、ニカーブから何が見えてくるのでしょうか。たとえばサラフ主義社会と呼びうるものの存在が浮かび上がってきそうです。ここでいうサラフ主義とは、一定のグループや集団ではなくて、先ほど言ったような、考え方、方法論を持つ人たちということですが、そういう社会があって、それが現在ヨーロッパにも入って、たとえばイギリスやフランスにも広がっている。そんな状況が見えてきます。以上が報告となります。ご清聴ありがとうございました。

■ 質疑応答

村上薫(司会) どうもありがとうございました。社会という言葉キーワードとして、それが単一ではない、あるいは理想として自分が構築する社会もあるのではないかという趣旨のお話であったと思います。では、事実関係の確認を中心に質問をお願いしたいのですが、どなたかいらっしゃいますか。

帯谷知可 ご報告の中で手袋のお話が出てきたのですが、手袋については私はほとんど聞いたことがなく、どのような議論があるか教えていただけますか。

後藤 手袋は、基本的にニカーブとセットなのです。「顔と両手を除いて」というハディースがあって、手も覆うべき部分であると考えられているので、サラフ主義の議論では、基本的に顔と両手を覆うというものがあります。